

論文要旨

On Labeling: Implications for Movement

(ラベル付けについて：移動への帰結)

鈴木 舞彩

本研究の目的は、極小主義プログラムの枠組みで新たなラベル付けメカニズムを提案し、移動に付随する残留現象・随伴現象に対して原理的な説明を与えることにある。

第 1 章では、生成文法理論におけるラベルの役割及びラベル付けの意義の変遷を概観し、その背景の下で、本稿全体に通底する枠組みとなる新たなラベル付けメカニズムを提案する。近年のラベル付け理論の発展に大きく貢献した Chomsky (2013, 2015) では、主要部と句を併合することにより得られる集合では主要部がラベルとなるが、句と句によって構成される集合については、そのままではラベル付けが不可能であるとされている。そして、後者の場合に当該の集合がラベルを持つためには、一方の句が内的併合を受けコピーとなることでラベル付けに対して不可視的になり、他方の句のみが可視的となる必要があると論じられている。一方、Mizuguchi (2019) では句と句から成る集合は多義的にどちらかの句をラベルとして選択できることが主張され、コピーのラベル付けに対する不可視性もまた棄却されている。本章は、*wh* 移動によって生じる *exactly* 残留のデータに基づき、対立するこの 2 つの先行研究にはどちらも経験的な問題があり、その解消にはコピーの不可視性のタイミングが重要であることを指摘する。その上で、本稿では、ラベル付けは転送領域毎に下から上へと適用されるが、経済性の要請により、転送領域内のコピーは後に一括で同じラベルを付与されると提案する。本章は、このシステムによってコピー自体のラベル付けが先送りにされ、結果的として、ラベル付けに対するコピーの不可視性と同等の効果が得られると論じる。これにより、句と句から成る集合において、多義的にどちらかの句をそのラベルとして選択できるのは、どちらか一方の句が内的併合によりコピーとならない場合に限られることが導き出される。さらに、句と句から成る集合が、ある転送領域を挟んでその内と外にコピーを形成する場合、両者には異なるラベルを付与可能であるという帰結も得られる。本稿の以降の章では、これらの帰結について詳細に論じる。

第 2 章では、本稿のラベル付けメカニズムの下で移動による残留現象を説明する。本稿は、2 つの句から成る集合は多義的にラベル付けできるのに対して、

一方の句がコピーである場合には他方の句が一義的にその集合のラベルに決定されると論じる。さらに、ラベル付けされた集合は、転送後、選択制限などのインターフェイス条件に基づいて評価される。この想定の下では、句 A と句 B の集合に関して句 A のラベルがインターフェイスで要求される場合、句 A が内的併合を受けた結果として句 B が集合のラベルになる派生はインターフェイス条件違反として排除されると予測される。一方で、集合全体がその位置に留まる場合や集合全体で内的併合を受ける場合には、多義的なラベル付けによってインターフェイス条件に従うことが可能となるため、それらの集合はインターフェイスで適格と判断されると予測される。本章は、主に *exactly* 残留の分析を通じてこれらの予測が正しいことを示し、本稿のラベル付けメカニズムが Chomsky (2013, 2015) や Mizuguchi (2019) のラベル付けシステムよりも経験的に妥当であると結論付ける。さらに本章は、数量詞遊離や VP 副詞残留 VP 前置に本稿の提案を拡張することで、Bošković (2004) による数量詞遊離の一般化が正しく捉えられることを示し、また VP 前置と VP 省略が VP 副詞残留に対して示す相違について考察を行う。

第 3 章では、本稿のラベル付けメカニズムの下で移動による随伴現象を説明する。本稿が提案するように、ラベル付けの適用回数が最小限となるよう同一転送領域内のコピーは一括で同じラベルを付与されるが、異なる転送領域にあるコピーは異なるラベルを付与可能であると考えることで、英語における大規模随伴 (*massive pied-piping*) の分布が正しく導かれることを示す。より具体的には、大規模随伴における *wh* 句を含む *a picture of whom* が句と句によって構成される集合を成し、それ自体が転送領域を越える形で移動することで複数のコピーが形成され、それぞれのコピーが Rizzi (2006) の「基準」を満たす形でそれぞれの位置で異なるラベルを付与されると主張する。このことから、主節内での主語の大規模随伴は可能である一方で、主節内での目的語の大規模随伴が不可能であるという事実も説明されると論じる。また、大規模随伴が Rizzi (2006) の基準凍結 (*criterial freezing*) の効果を示さないことを指摘し、Maeda (2019) による *feature-relativized criterial freezing* を採用することで、本章の提案する大規模随伴の派生が基準凍結に違反しないことを明らかにする。最後に、本章の帰結として、程度詞前置 (*degree fronting*)、不連続な書き出し現象 (*discontinuous spellout*)、感嘆構文の 3 つの現象についても、複数のコピーが異なる転送領域で異なるラベルを付与された結果、基底生成位置で選択制限を、最終着地点で「基準」を満たす例として分析可能であることを示す。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	鈴木 舞彩
論文審査担当者	(主査) 教授 島 越郎 教授 大河内昌 准教授 中村太一
論文名	On Labeling: Implications for Movement (ラベル付けについて：移動への帰結)
<p>本研究は、極小主義プログラムの枠組みの下、統語構造の解釈に関わるラベル付けメカニズムを新たに提案し、移動に付随する残留現象と随伴現象に対して原理的な説明を与えている。</p> <p>第1章では、生成文法理論におけるラベルの役割及びラベル付けの意義の変遷を概観し、近年のラベル付け理論の発展に大きく貢献した Chomsky (2013, 2015) と Mizuguchi (2019) の分析の問題点を指摘した上で、「統語構造のラベルは構築された構造が解釈部門に転送される領域毎に構造の下から上に順次決まるが、経済性の要請により内的併合により生じたコピーは一括で同じラベルを付与される」という新たな仮説を提案している。この仮説によると、転送領域内におけるコピーのラベル付けは常に先送りされ、ラベル付けに関するコピーの不可視性効果が得られる。また、句と句から成る集合において、どちらか一方の句が内的併合によりコピーとならない場合に限り、どちらの句もラベルとして選択できる。さらに、句と句から成る集合が、ある転送領域を挟んでその内と外にコピーを形成する場合、両者には異なるラベルを付与することが可能となる。</p> <p>第2章では、新たに提案したラベル付けメカニズムの下で移動による残留現象を説明している。本研究のラベル付けメカニズムによると、句 A と句 B の集合に関して句 A のラベルがインターフェイスで要求される場合、句 A が内的併合を受けた結果として句 B が集合のラベルになる派生はインターフェイス条件違反として排除されると予測される。また、集合全体がその位置に留まる場合や集合全体で内的併合を受ける場合には、多義的なラベル付けによってインターフェイス条件に従うことが可能となるため、それらの集合はインターフェイスで適格となると予測される。これらの理論的予測が経験的に妥当であることを、wh 移動によって生じる <i>exactly</i> 残留、数量詞遊離、動詞句前置に伴う副詞残留に関する個別の言語現象の詳細な分析を通じて論じている。</p> <p>第3章では、本研究のラベル付けメカニズムの下で移動による随伴現象を説明している。本研究の仮説によると、ラベル付けの適用回数が最小限となるよう同一転送領域内のコピーは一括で同じラベルを付与されるが、異なる転送領域にあるコピーは異なるラベルを付与することができる。このようなラベル付けが、英語の wh 疑問文における大規模随伴の派生で行われていることを論じている。具体的には、大規模随伴における wh 句を含む <i>a picture of whom</i> が句と句によって構成される集合を成し、それ自体が転送領域を越える形で移動することで複数のコピーが形成され、それぞれのコピーに異なるラベルが付与されると論じている。また、程度詞前置や感嘆文においても、複数のコピーが異なる転送領域で異なるラベルを持つと分析している。</p> <p>以上のように、本研究は、極小主義プログラムの下で統語構造の解釈に必要なラベル付けに関する新たな仮説を提案しており、英語の記述的・実証的研究および言語理論研究の進展に寄与している。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	